

# 新しい学力観に基づく教育を展開 海外大学への進学も視野に入れ グローバル社会で活躍できる人材を育成

「新しい学力」「新しい人間力」の育成を掲げ、斬新な教育プログラムを実践している海城学園。その教育内容は、先ごろ公表された教育再生実行会議「第四次提言」の大学入試改革の方向性を先取りしている観もある。同校が育成をめざす人材像とはどのようなものなのか、中田大成教頭に伺った。



海城中学高等学校  
教頭 中田 大成先生

## 「課題設定・解決型」の 学力が問われる大学入試に

— 教育再生実行会議「第四次提言」に  
対するご意見をお聞かせください。

中田 「第四次提言」では、基礎学力は「達成度テスト」の発展レベル(仮称)で測定し、しかも複数回受験を可能にするとともに、1点刻みの点数ではなく、段階評価の成績を入試で利用することを提言しています。その上で、大学ごとの個別試験では、いわゆるペーパーテストではなく、面

接、エッセイライティング、中高時代の活動経験などを重視して選抜することを求めています。この提言に対して賛否両論あるようですが、私は日本が国際競争を生き抜く上で不可欠な入試改革になると考えています。なぜなら、これまでの大学入試では、従来型の「知識獲得型」の学力しか測れていませんでした。キャッチアップ型の社会ならそれで通用したかもしれませんが、日本は成熟社会になり、多様な課題を世界に先駆けて解決しなければならぬ状況が到来しています。今後は知識を総合・統合して、随時価値判断しつつ、問題解決していく「課題設定・解決型」の学力が求められます。大学入試がその学力をきちんと評価する形

に移行すること、そして、それを基軸として、大学、中高教育双方が、新しい学力を育む質的な転換を図ることが重要です。それを実現しなければ、日本はグローバル社会で生き残ることはできないでしょう。

— とはいえ、大学入試において、「課題設定・解決型」の学力を客観的に測定するのは難しい気もしますが……。

中田 はじめから「難しいからできない」と逃げ腰になるのは、大学が十分なりサーチを行っていないからです。私が「日本アドバイザリー委員会」委員を務めている「国際バカロレア」(世界の有力大学が採用する大学受験資格)では、すでに「課題設定・解決型」の学力をきちんと定量化して評価する仕組みを整えています。日本の大学も、そうした評価手法を参考に、新しい学力を評価する方法を開発し、普及させることが必要になります。「第四次提言」では、5〜6年後を目処に大学入試を改革するとしており、これから中学に入学

してくる生徒たちは、新しい入試制度のもとで大学入試に臨むことになります。それに対応できる教育を行っているかどうか、今後の学校選択の基準になるでしょう。本校は、新しい学力観を見据えた教育を先取りしており、十分に対応できると自負しています。

## 共生力を高める 多彩なプログラムを導入

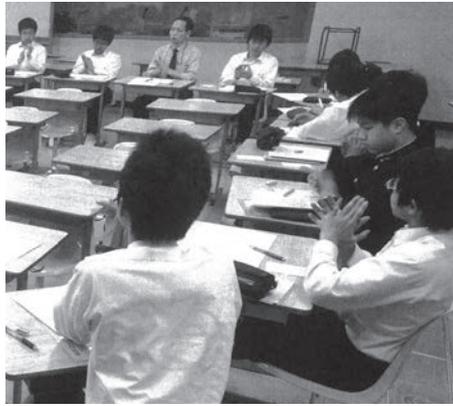
— 確かに、海城学園では「新しい学力」「新しい人間力」の育成を掲げて、多彩なプログラムが導入されています。

中田 約10年前から、10名程度の生徒でグループを編成し、与えられた課題を協力しながら解決する「プロジェクトアドベンチャー」を取り入れていきます。大人の体験を聞き書きし、それに基づいて班員全員でシナリオを書いて演じたりする「ドラマエデュケーション」も行っています。いずれも、グローバル社会を生きる子どもたちにとって不可欠な「他者との違いを乗り越えて





卒業論文に取り組むことで社会を見つめる目を養います。



発表が終わったら拍手を送ります。聴く側のマナーも身につけています。

共生・協働する力」を育むプログラムです。また、社会科では自分で設定した課題を調べ、レポートにまとめる総合学習を20年以上前に導入。中3では各自が原稿用紙30枚以上の卒論を仕上げ、「自ら課題を設定する力」「情報を収集・分析し、深く考える力」「考察した結果を周囲に分かりやすく表現する力」などを養成しています。もちろん、各教科の基礎基本をおろそかにしているわけではなく、それはきちんと習得させた上で、こうした新しい学力観に基づく独自の教育を継続し、さ

らに強化・洗練させていくつもりです。そうすれば、新しい大学入試システムを何ら恐れる必要はなく、むしろ本校の生徒にとっては、より実力を発揮しやすくなるかと確信しています。

——サマーキャンプの具体的な内容を教えてください。

**中田** バスで出発する時点から完全に日本語禁止にして、英語漬けの研修を行いました。1グループ10名の生徒に1名のネイティブ講師がついて、クリケット、ラグビーなどのイギリス発祥のスポーツ文化に触れたり、グループごとに英語のシナリオを創作

——2012年4月に「グローバル教育部」が発足しました。どのような活動を推進する組織なのですか。

**中田** 本校では、2011年度から中学校で「帰国生入試」(募集人員30名)を導入しました。海外で異文化を体験した生徒と一緒に学ぶことよって、その体験を共有し、視野を広げることが期待されています。「グローバル教育部」の第一の目的は、この帰国生たちが学校生活に早く馴染めるように支援することです。また、一般生徒の英語学習のモチベーション向上もめざしており、昨年の夏休みに、中2の希望者を対象に、菅平で2泊3日のイングリッシュ・サマーキャンプを実施しました。

**海外大学志望者へのサポートがさらに本格化**

してスキット(寸劇)を演じたりする中で、楽しみながら、英語を聞き取り、話す力を高めることができたようです。さらに、海外大学への進学をめざす生徒のサポートも今後厚くしていきます。その背景には、昨年、海外の大学進学に関する講演会を実施したところ、200名弱の親子が参加するなど、関心が高まっているという状況があります。欧米の大学入試制度は日本とは大きく異なりますから、「グローバル教育部」で早い段階から進学カウンセリングを行うとともに、TOEFL、IELTS、SAT、エッセイなどの試験対策や、出願書類作成支援などのバックアップ体制を整えています。2014年度からは、そうした指導を強化するために、専任のネイティブ教員を複数採用します。ハーバード大学を卒業後、東大の大学院で学び、両校を比較した著書もある語学の専門家など、優秀な人材の招聘が内定しています。

——2014年度の「帰国生入試」で、新しい方式が導入されたようですが……。

**中田** 「算数」「総合」「英語」で選抜する「C方式」を導入しました。ただし、「英語」のテストは単純な単語力や、英文和訳、英文法などの知識を問う形式ではなく、自分の考えを英語で主張させるような問題を出題しました。この「C方式」の導入に伴って、より英語力の高い生徒が入学してくることも想定されます。これまでは、正

規の英語の授業は全員同じ内容にして、英語力の高い生徒に対しては、放課後の特別講習で対応していましたが、けれども、2014年度からは、正規の授業でも、高い英語力を備えている生徒に対しては一部「取り出し授業」を実施し、その保持・増進を図っていきます。このように、本校ではグローバル化への対応に力を注いでいきますが、強調しておきたいのは、それは単純な英語力強化をめざすようなものではないということです。何よりも大切に行っているのはリベラルアーツです。流動性の高い社会で、絶対的な真理が見えない中、ビジネスでも行政でも自分なりの価値判断が求められるときに、ぶれない軸の基盤になるのは、歴史の風雪に耐えてきた古典から学ぶ普遍的な知見です。それを獲得しているからこそ、本物のグローバル人材の要件であると、私たちは考えています。

**School Data**

**海城中学高等学校**

- 所在地 〒169-0072 東京都新宿区大久保3-6-1 JR山手線「新大久保」駅から徒歩5分 地下鉄副都心線「西早稲田」駅から徒歩8分
- 電話 03-3209-5880
- 校長 水谷弘
- 創立 1891年
- URL <http://www.kaijo.ed.jp>